九州天皇家論
2章　天孫降臨

出雲王朝征服譚

豊葦原中國」は小倉北区

古事記は、この時、「豊葦原中國」について瓊瓊杵尊の感動を紹介している。

> 此地は 韓国に向かひ　笠沙（かささ）の御前を真来通りて　朝日の直刺（たださ）す国
> 夕日の照る国なり　故　此地は甚吉（いとよ）き地

此地とはどこか。古事記の記述からは、「高千穂の峯（足立山）」で詠んだと思える。企救半島の足立山の山頂からは小倉北区が一望できる。

> 韓国に向かひ　朝日の直刺す国　夕日の照る国

山頂からの眺望はまさにこのように詠うにふさわしい。小倉北区全体を俯瞰できるこのロケーションで瓊瓊杵尊の歌は活きる。「韓国」を海の向こうに見ている。足立山から見る小倉北区はまさしく朝日に輝き、夕日に照る國である。平地ではとてもこのような悠然とした感想を持つのは難しいであろう。

「高千穂」（足立山）から見た「葦原中國」（小倉北区）

（adajp2001.web.infoseek.co.jp/kinkou/adayam/adayam.htm）

「笠沙（かささ）の御前」とはどの岬であろうか。まず名前から判断して笠のように見える岬であろう。足立山から小倉北区に下って笠のような形で海に面している丘は「手向山」である。現在「手向山公園」に指定されているこの小山が「笠沙（かささ）の御前」にふさわしい。

日本書紀の記述は異なる。日本書紀では「高千穂の峯」に降った（登った）後、下山してさらに進む。

> 膂宍（そしし）の胸副國（むなくに）を頓丘（ひたお）から國覓ぎ行去（とほ）りて、吾田の長屋の笠狭崎に至ります。

この文意が難しい。日本書紀（日本古典文学大系）・頭注はつぎのように解説している。

荒れてやせた土地を通って、良い國を求めて、吾田の長屋の笠狭崎に来た。

瓊瓊杵尊は山から下りて、「笠狭崎」までやって来た。「覓ぎ」とは「領有すべき土地を求めて手にれて」という意味である。そこで一人の人物と出会う。彼は「事勝國勝長狭(ことかつくにかつながさ)」と名乗る。そこで瓊瓊杵尊は尋ねる。

・・・國があるか。
・・・此処に國があります。請(ねが)はくは任意(みこころ)に遊(みた)せ。

こうして、瓊瓊杵尊はその國に「留住(とどま)った」。また、「一書」ではこのように書く。

瓊瓊杵尊、日向の槵日の高千穂の峯に降到りまして、膂宍(そしし)の胸副國(むなそふくに)を頓丘(ひたを)から國覓ぎ行去(とほ)りて、浮渚在平地(うきじまりたひら)に立たして、乃ち國主(くにのぬし)事勝國勝長狭を召して訪ひたます。応えて曰さく、「是に國有り。取捨勅(ともかくもおと)の隋(まにま)に」とまうす。時に皇孫、因りて宮殿を立てて、是に遊息(やす)みます。

どちらもほぼ内容は同じである。瓊瓊杵尊は「豊葦原中國」を目指して、まず企救半島の「高千穂の二上峯(足立山)」に降臨し、山を下って豊葦原中國に向かった。だからといってそこに國の看板が出ている訳ではない。國とは抽象的な存在である。そこで瓊瓊杵尊は「事勝國勝長狭」に尋ねる。國があるか。この地を治めている王は誰か。

「事勝國勝長狭」が土地の主であった。彼は答える。王は自分だ。だが、皇孫のすきなように。もはや出雲國の大王・大國主命が「天の日隅宮」に引退させられた以上やむを得ないことであった。瓊瓊杵尊はこの地に宮殿を建てて住んだ。日本書紀ではここで歌を詠む。

此地は韓国に向かひ　笠沙(かささ)の御前を真来通りて　朝日の直刺(たださ)す国　夕日の照る国なり　故　此地は甚吉(いとよ)き地

瓊瓊杵尊の宮殿はどこにあったのか。行路は足立山－笠沙岬－此地である。「此地」はまず山の麓ではない。朝日が注ぐ、夕日が照る土地である。東西に山がない平野部であろう。

韓国に向かうと詠っている。韓国に向いているというだけなら北九州の地はどこも韓国に向いている。この意味はそのような観念的の意味ではなく、韓国へ向かって航路が開けているという意味であろう。古来、韓国と交流・交易している國だという意味である。瓊瓊杵(ニニギ)が侵攻した出雲王朝の國、「豊葦原中國」とは小倉北区である。「豊葦原中國」とは紫川下流に開けた葦の茂る土地、小倉北区であった。古来、韓国との交通路が開けていた。